
「ジョージ。」

ココナツ・サム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ジョージ。」

【著者名】

ココナツ・サム

【あらすじ】

一度は寝かしつけたはずの夢、アメリカ。ジョージは社会のレベルを降り、海を渡る。今時流行らない、古臭い夢に向かって。

1991年3月30日、ほぼ予定通りの午前9時45分、気持ちよく晴れ上がったロサンゼルス国際空港に飛行機はすべりこむように着陸した。

ロサンゼルスに来るのは初めてではない。仕事がらみの旅行で一度、プライベートの旅行で一度来たことがある。

今度が三度目ということになるが、今までと決定的に違うのは、今回は帰る予定がないということだ。

マンションも引き払ってきた。整理できるものは全部整理し、持つて来られないものは皆人にやつてきた。

今度の俺の全財産はバックパック一つとポケットにある僅かな金だけだ。

俺もう26歳、次のチャンスはない。これでダメだつたら田舎に帰つておとなしく暮らすつもりだつた。

ただ、やってみないまま諦めてしまうのは嫌だつた。

何もないゼロからだけど、これからアメリカに住むと決めていた。

「Sign to see in going?」

「Yes.」

「How many days?」

「Ten days.」

「OK! Have a nice trip.」

「Thank You.」

ターンテーブルから荷物を受け取り、簡単な入国審査を済ませると、

こちら側とあちら側をへだてるドアに向かつた。

「この扉を越えたらもう後戻りは出来ない。」

帰りのチケットは一応持っていたが、それを使う気はなかった。
覚悟はできていた。

躊躇なくドアを抜けると、迎えの人達のざわざわとした声が聞こえてきた。

無論俺の迎えではない。

「やつとここまで来た。」

その時はそう思った。

実はそれからが始まりだった。

「実は俺、子供の頃からアメリカに行きたかったんだよね。俺は愛美にそう告げた。

彼女は少しだけ考え込んだようだった。

やがて少し微笑んで言つた。

「ジョージがそう思うなら、行けばいいじゃない。やりたいことをやつたらいい。」

2月も終わりにさしかかるといつとう頃だつた。

俺は一月の末で、それまで勤めていた不動産屋を辞めていた。とは言つても、俺は三年ほど前にその会社を一度辞め、田舎に引っ込んでいた。

そこで雑誌の編集記者をやつていたのだが、その不動産屋でカナダでの新しいプロジェクトが進行し、どうしても俺が必要だと言われ、東京に呼び戻されたのだ。

しかし、あらうことか俺とは関係のないとこで別件の事業が失敗し、会社自体が立ち行かなくなり、二度目の辞表を出した。

仕事を辞めて、少し休んだ後、今後の身の振り方を考えた。

また田舎に帰つてのんびりして暮らす方法もあつたが、あそこにはあまり仕事がない。

それに、わざわざ愛美を田舎から呼び寄せて一緒に暮らし始めた。

すでに生活の基盤が出来つつあった。

不動産屋の仕事ならいくらでもあつた。それまでの経験を生かすことも出来たし、仕事上の繋がりもあつたから、「うちに来いよ」「よ」と言つてくれる奴も何人かいだ。

編集記者の経験もあつたから、マスコミ関係とか広告代理店なんか

も考えられた。

自分にはそれだけの能力があると思つていたし、やつていく自信もあつた。

「俺、十分休んだし、そろそろ仕事探すわ。」

「急がなくていいよ。今まで大変だつたんだから、じつくり休んで、それから考えたらいいよ。今すぐ生活に困るわけじゃないしさ。」

「うん、でも、毎日家でいろいろしてゐるもさ。俺、家事とかやるわけじゃないし。」

「あら、家事を手伝ってくれてもいいのよ。」

このままでは本当に家事をやらされそうだ。

「冗談じやない、自慢じやないが俺は家の事は何も出来ない役立たずだつたりする。」

毎日の家事が大変なのは分かつてゐるが、俺がやっても仕事を増やすだけだ。

家事をやらされる前に仕事を見つけなければ。

空港にはもつといろんな人種がいるかと思つていたが、意外と日本人っぽい人が多い。

フライトが皆同じような時間帯に着くからか、それとも、迎えに来るなんてのは日本人だけなのか。

まあいい、どつちにしても俺には関係のないことだ。

ごちゃごちゃと集まっている人の群れの間を抜け、外へと足を踏み出した。

とりあえずの行き先は決まっている。ダウンタウンのリトル東京だ。そこでなら仕事が見つかりやすいだろうと思ったからだ。

今みたいにインターネットなんてなかつた時代だつたから、電話と手紙とファックスで寝るところは確保しておいた。一ヶ月400ドルのアパートメントホテルだからどんなところかは大体想像がつくが、しばらくはそこで暮らすことになる。雨露がしのげて、シャワーさえ浴びられれば何とかなるだろう。

何しろ、知り合いも居なければ金も無い、何のあてもなくやつてきたのだから贅沢は言つていられない。

アメリカって国は本当に合理的な国で、いろいろと便利なものがある。

乗り合いシャトルバスもその一つだ。

同じ方向に行くもの同士がバンに相乗りして空港から目的地に向かう。

料金は基本的に頭割りだから、人数が多くれば多いほど一人当たりは安くなる。

だから、俺たちが乗つたままバンが客を探して空港をグルグル何回も回つても誰も文句を言わない。

ドライバーも、多く乗せればちょっと収入が増えるのだろう、結構辛抱強く回っている。

何しろロサンゼルスは広い。一度どこかに行こうとしたら、1～2時間は簡単にたつてしまつ。

一回のトランسفァーで少しでも多く稼げることだらう。
俺たちにしても一人でも増えれば少しは安くなるのでその方が都合がよかつた。

結局俺を入れて8人の客を乗せてバンはダウンタウンに向かって走り出した。

ロサンゼルス国際空港を出ると、車はほどなくフリーウェイ405号線に乗り、すぐにフリー・ウェイ10号線に乗り換える。
高架になつてているので結構遠くまで見える。

ここから見る景色は整然として、ところどころに高いやしの木があつたりしてとても開放的に、きれいな街並みに見える。
でもそのやしの木の下に行つてみるととんでもない所であることも俺は知つている。

遠くに高層ビル街が見えてきた。あれがダウンタウンだ。
ビルの天辺の方はスマッジで空気が黒く濁っているのがここから見ても分かる。

今日からあそこで勝負するんだ。

「お帰りー。ちゅうじお茶入れるといいだけど、飲む？」
ある日の午後のことだった。

外から帰ってきた俺に、愛美が声をかけた。

「ああ、そういう時間だと思つてショークリーム買つてきた。」
俺たちが住んでいたマンションは、広くはなかつたが田舎たりだけ
は抜群に良かつた。

「美味しいねー、このショークリーム。新しいお店？」

「ああ、一ヶ月くらい前にオープンしたらしい。俺も全然知らなか
つたよ。」

「どこ？」

「駅前から渋谷側に一本入つたとこ。」

「分かりやすい説明をありがとう。」

愛美のことだから、明日あたり自分で見つけへる」とだらけ。

「でさ、仕事のことなんだけど。」

「うん。」

「今一つまで絞つたんだ。」

「一つはホテルの仕事。もう一つはユニフォーム屋さん。」

「・・・・・」

「聞いてる？」

「聞いてるけど、それじゃ全然わかんないから。」

「これから話す。ホテルのほうは、新横浜のホテルのフロント。半
分ビジネスホテルみたいなもんだけど。最初は一番下つ端の見習い
みたいなところから。もう一つは武蔵小杉にあるユニフォーム屋さん
で、デリバリーとルートセールス。いろんな会社でユニフォームと
か着てるじゃん。それをレンタルして、クリーニングする会社。ど

「ちちもこじから通えるし、給料は同じくらいかな。」

「・・・ふーん。ジョージにしては随分地味な仕事選んだね。不動産とかやらないの?」

「それも考えたんだけどさ、なんか、もう派手なことやるのが嫌になつて。地味に、長く働けるようなところを探したんだ。営業だつたら仕事はすぐあるし稼げるだろうけど、俺の性格だからすぐに飽きちゃうだろ?。いろいろ考えて、これからは目立たず地道に生きていこうと思つて。誠実に、コソコソと生きてみようと思うんだ。」
「・・・なるほどね。どうこう心境の変化なのか知らないけど、いいんじゃない?やってみれば?」

「うん。ありがと!。」

それから取りとめもない話をした。

愛美にアメリカの話をしたのはそんな時だった。

今後の方向性も決まって、気が少し緩んだのだらう。
アメリカ行きの夢は確かにガキの頃からあつたが、その想いは寝かしつけたつもりだった。

これからはこじで「ソシコソと働きながら愛美と静かに暮らしていく。そんな絵を描いていた。

想いを憧れにすり替えて生きていけると思つていた。

何より、アメリカ行きなんて非常識な夢を理解してもらえるなんて思つていなかつた。

俺にとつては愛美を取るか、アメリカを取るか。

迷うまでもない、愛美に決まってる。

歳を取つたら、若い頃はこんな夢もあつた、そんな風に昔話として話せる日も来るだろ?。

自分では割り切れたつもりでいた。

車は見覚えのあるロサンゼルスのダウンタウンに入り、殺風景な街を走つて独特の雰囲気があるエリアに入った。

「お客さん、ここでいいかい？」

やたら日本語の看板が目立つ街の一角にバンは止まつた。

「ああ、ここでいい。ありがとう。」

ここがこれからしばらく住むことになるリトル東京だ。ここなら安宿もあるし、レストランもたくさんあるから何かと便利だろう。治安はそれほど悪くはなさそうだが、一本道路を越えるとやっぱそういうこともある。

支払いを済ませると、バックパックを担いで歩き出した。目的の宿はここからそう遠くない、数分の距離のはずだ。

このバックパックってやつは便利でいい。

本格的なフレームザックは背負えないが、このバックパックならちよつと大きな縦長のリュックサックといった感じだ。

詰め込めば結構収納力もあるし、何より両手が自由になるのがいい。それに、取り外しのできるディパックもおまけのようにくっついている。

荷物を降ろしたら、そのディパックさえ背負えば動き回れるというわけだ。

背中にくつづけてさえいれば、田を離すこともないし、ひつたくられることもない。

もつとも、パスポート以外は失くして困るものもなかつたが。

「いいか。」

俺は「さくらホテル」の前に立つていた。この名前もどうかと思つが、まあいいだろう。自分で予約したんだから。

ホテルとは名ばかりの小さなガラスドアを開けるといきなり階段だつた。2階が受付らしい。

階段を上るとパチンコ屋の両替所のような受付があつた。

「今日から予約してるんですけど。」

ガイドブックにここには日本語が通じると書いてあつたので日本語でたずねた。

「ああ、ジョージさんね。一ヶ月ね。400ドル、前払いだよ。観光に来たの？」

おばさんは韓国系だらうか、ちょっとアクセントがあるが流暢な日本語で答えた。

「まあ、そんなとこです。」

「じゃ、ジョージさんの部屋は5階の503号室ね。パンフサインして。」

サインするほどのこととなからひ。一田で全部を理解できるような簡単な書類だつた。

「これが部屋の鍵ね。いつもが下の入り口の鍵。夜10時になつたら閉めちゃうから。鍵を失くしたら150ドルもらうからね。廊下の突き当たりにシャワー室があるよ。タオルと石鹼は自分の使つてね。シーツの交換は週一回。月ぎめで住むんなら毎月25日までに次の月の分を払つて。」

簡単な説明を聞いた後、動きが怪しいエレベーターに乗つて、俺は5階に上がつた。

「503か。」

廊下の両側にいくつか部屋が並んでいる。昔のアパートみたいな作りだ。

エレベーターから見て右側が奇数、左側が偶数の部屋番号になつていた。

突き当たりにもドアがある。あそこがシャワー室らしい。

まずは荷物を置いて、シャワーを浴びたかった。

愛美にアメリカ行きの話をしてから数日の間、俺の頭は混乱していた。

もしかしたら今、俺にはアメリカに行くという選択肢があるのか？
でも愛美はどうする。

理解してくれたとはいえ、何がどうなるか分からないアメリカと一緒に連れては行けないだろう。

メシさえ食えないかも知れない、へたしたらホームレスにだつてなりかねないのに。

愛美をそんな目にあわせるわけには行かない。

でもこれが最初で最後のチャンスかもしない。

このままホテルかユニフォーム屋に就職したら、一度とチャンスはないだろう。

もしあつたとしてもその時俺はいくつになつてているだろうか。
体力も精神力も持たないに違いない。

何より、泥水をするような暮らしには耐えられないだろう。
今行くか、一生行かないか。

一度は寝かしつけたはずのアメリカの夢がむくむくと頭をもたげてきた。

一人で決められることではない。

俺は愛美ともう一度話し合つた。

俺が考えていること、心配していること、全部話した。

愛美はただ淡々と聞いていた。

「私、ジョージにはいつまでも夢を追いかけて欲しい。私のために地味な仕事に就くつて言ってくれた時嬉しかったけど、やっぱり

私は夢を追いかけているジョージが好きなのよ。今アメリカに行くチャンスがあるなら行ってみればいいよ。だって最後のチャンスかも知れないんでしょ？」

「私のためにジョージが夢を諦めるつて言うなら、私はジョージの重荷でしかないのよ。私はそんなの嫌だし、ジョージらしくないよ。やってみて、ダメだつたら日本で大人しく暮らせばいいじゃない。私は大丈夫。大丈夫だから。」

俺は涙が出そうになつた。

男のバカな夢を分かつてくれるどころか、背中を押してくれることこの女だけはどんなことがあっても一生かけて必ず幸せにする。そういう心に誓つた。

「分かつた。でも、どうなるかまつたく分からないところに君と一緒に連れて行くことはできない。だから、俺は一人で行って、死に物狂いで何が何でも絶対にチャンスをつかんでみせる。そして、必ず君を迎える。半年かかるか、一年かかるか、何年かかるか分からんが、必ず迎えに来る。それでいいか？」

何とか搾り出すように、それだけ答えた。

部屋は思つたよつきれいだつた。

大きさで言つと3畳間よりちょっと小さいくらいだろうか、その半分をパイプで出来た簡素なベッドが占めている。あとは、小さいテレビとテレビ。ああ、テレビはあるんだ・・・それに小さなクローゼット。一応窓はあるが、開けてみると隣の建物の壁が田の前にあつた。

部屋の端に手洗いくらいの流しと、古い電気コンロがある。これでお湯くらいには沸かせるだらう。

バックパックからタオルと石鹼を取り出してシャワー室に向かつた。日本を出る前にシャワーを浴びただけだから、体がべたべたして気持ち悪い。ロサンゼルスは乾燥しているとは言つものの、やはり汗はかく。

シャワー室のドアを開けてみてなるほどと思った。

要するに、部屋も、シャワー室も、学生寮のような作りなのだ。これで一階に食堂でもあれば完全な学生寮だ。

古びたタイル貼りの部屋に、シャワーべッドが二つ並んでいる。もちろん日本の銭湯ではないから、立つたまま浴びる。隣のブースとの間仕切りは申し訳程度にあるが、気休め程度だ。これで女の子でも居たらどうするのだろう。そんな余計な心配をしながらシャワーを浴びた。

着替えて部屋に戻つてから気づいた。

洗濯はどうするのだらう。近くにコインランドリーとかあるのだろうか。

まあいい、後でおばさんに聞いてみればいい。

洗濯物をとりあえず袋に投げ込み、ベッドに横になった。

ずっと飛行機に乗っていたのと、時差ボケとでくたくたに疲れていた。

腹も減っていたが、少し眠つてからにしよう。

そんなことを考えたか考えないかのうちに眠りに落ちていた。

アメリカに行くと決めてから、そのことだけ考えて準備しました。
まず仕事のオファーを全部断つた。

履歴書を出した所や面接の連絡をもらつたところには電話だけで済んだが、ホテルとユニフォーム屋だけは直接担当者に会いに行つた。
どちらも面接時に俺の話をちゃんと聞いてくれ、俺の想いを分かつてくれた上で来いと言つてくれた会社だからだ。

仕事を断りに行つただけの俺の話をよく聞いてくれた。
その上で俺の夢を応援してくれ、もし帰つてくれることがあつたらいつでも来いと言つてくれた。

日本で最後にこんな素晴らしい会社と出会えてよかったです。
どちらかを選ぶことなんてできなかつただろう。
この人達の気持ちを決して忘れるまいと心に刻んだ。

一方でチケットの手配に入つた。
パスポートはまだしばらく切れないから大丈夫だ。
さて、こいつの便にしようか。

身の回りをきちんと整理するのには一ヶ月くらいはかかるだろう。
幸い学生時代の友人が旅行代理店に勤めていた。
相談してみたが、安いのは3月末くらいだろうとのこと。
どこのオンラインでもいいから取つておいてくれと伝えた。

さて、そうなると時間は一ヶ月しかないが、逆に言つと一ヶ月もある。
その間ただ準備だけで食いつぶすわけにはいかない。
一ヶ月間だけ出来る仕事を探した。

その結果考え付いたのが警備員だ。

これなら一種のアルバイトだし、給料もそれほど悪くない。
一日働けば一万円くらいになるし、いざとなれば日払いもできる

のできりぎりまで働けそうだ。

目黒の会社と話をつけた。

これからしばらくは日雇いだ。

あまり眠れなかつたらしい。時計を見ると夕方の5時だつた。

「そうか、目覚ましも買わなきやな。」

疲れは残つていたが、少しは楽になつた。

これからのことを考えたら疲れたなんて言つていられない。

初日は疲れを取つて？冗談じやない。俺にはそんな時間はない。

一日でも早く愛美を迎えて行くんだ。

そう思つとちゃんと体が動いた。

リトル東京という場所を選んだのには理由があつた。

安いホテルアパートメントがあるのも理由の一つだが、一番の理由はもちろん日系のビジネスが多いことだ。

ビザもないのにアメリカの会社が雇つてくれるとも思えない。

それに、アメリカ人のやり方が分からぬので、いざという時どうなるか不安だつた。

日本語が必要、もしくは日本人でなければ出来ない仕事ならチャンスもあるだらう。

永住権を取りやすいと言つた話も聞いていたので、レストランに狙いを定めていた。

ここに来るまでの間にも日系レストランはいくらでもあつた。なに、100軒もあたれば一軒くらいは引っかかるだらう。それでダメなら200軒回ればいい。

見つかるまで何軒でも回つてやる。

「今店長がいないので分かりません。」

「うちは今募集してないから。」

「永住権持つてんの？ないならダメだなあ。」

この時間はちよつとうディナー営業のオープン前の準備で忙しいのだ
ら、あまりちゃんと相手にしてくれるところも少なかつた。

話を聞いてくれてもこんな返事ばかりが返ってきた。

中には、「うちは今人手は足りてるけど、他で人探してる所があつたら声かけてやるよ。連絡先残してきな。」といつ親切なところもあつた。

全然きつことは思わなかつた。

飛び込み営業に比べたら楽なもんだ。何しろ、一軒ヒットすればOKなんだから。

必ず雇つてくれるところはある。そう信じていれば、断られるということはダメなところをつぶして行く作業に過ぎなかつた。
一軒断られる」とこ、「当たりに近づいている」「次は当たる確率が上がつた」と思いながら回つた。

30軒くらい回つただろうか、一軒だけ、「今親方が居ないんで分かんないけど、明日の2時過ぎくらいに来てみてくれる?その時間なら居るから。」という店があつた。

そこの店で晩飯を食べた。

まさかアメリカに来て初めての食事がラーメンになるとは。
何故か店の人気がヨーザをつけてくれた。気が張っていた時に親切にされたようで、嬉しかつた。

その後も何軒か回つたが、芳しい返事はもらえなかつた。

日雇いの警備員の仕事ははつきり言つて退屈だった。制服、靴と赤い棒みたいなのを渡されて、主な仕事は工事現場の交通整理だった。

最初はいくつかの現場を口替わりで回っていたが、やはりこういう仕事は毎日やる人間が少ないのだろう、そのうちにマンション建築の現場に固定になった。

交通費は一応支給された。

面倒くさいので制服のまま電車で広尾まで通勤していた。周りの人にも現場の人にも珍しがられたが、別にどうでもよかつた。大した問題じやない。

一方でビザのことをいろいろと調べた。

日本人はアメリカに行くのにビザ・ウェーバーがあり、ノービザで三ヶ月滞在できる。

しかし、三ヶ月では心もとなかった。

観光ビザがあれば六ヶ月は滞在できる（どちらにせよ働けば違法だが）。

さらに、うまく行けば最高一年までは延長できるのだ。

よくよく調べてみると、観光ビザで入国すると、永住権を取る時に（たとえ切れていたとしても）ビザの切り替えという形を取れるらしい。ノービザだと面倒なようだ。

いろいろと知識が増えしていく。渋谷の本屋にある関係資料は全部目を通した。

こういう時東京は便利だ。

マンションのオーナーには3月一杯で出る旨伝えた。

敷金がいくらかは戻つてくるらしい。

電話の権利を手放したり、処分できるものは処分したり、いろいろとやらなければならぬことがあった。

しかし、日本を出る出来るだけギリギリにやらなければならぬ。それまではここで生活するのだから。

愛美をずっとここに置いておくわけにはいかなかつた。知り合いも親戚も居ない東京にこのまま居る理由もなかつた。何より、生活費が高すぎる。

「大丈夫よ。待ってる間田舎に居るから。」

それが一番いい。それなら俺も安心だ。

そんな頃、旅行会社の友人から連絡が入つた。

3月30日の便を取つてくれたらしい。

一応往復チケットで7万円ということだつた。

「ところでビザのことなんだが、三ヶ月まではビザなしだろう? それ以上滞在するスケジュールを組めばビザ申請が出来るのかな。銀行残高はどれくらい用意すればいいの?」
調べてくれるとのことだつた。

こいつの時、持つものは友達だなと思つた。

よく寝た。

昨日初日からあれだけ歩いたのが良かつたのだろう、夜10時半頃から朝の9時過ぎまでぐっすり寝た。

近くにあるコンビニでテレホンカードみたいなのを売っていたので、昨日寝る前に愛美に電話をした。とりあえずしばらくなは妹のマンションに転がり込むことにしていた。

元気そうな声を出していたが、内心は寂しいだろうな。

一日も早く迎えに行くから、と再度約束した。

愛美のことを想つて、また、これから始まるという興奮で眠れないかと思ったが、すぐに眠りに落ちた。

俺も案外団太いな。

起きても仕事を探す以外することがない。

自由なようでいて、退屈なものだ。

レストランというものは、何時こりから準備に入るものなのだろう。この時間に行つたら瞬間で叩き出されそうだ。

まずは日用品を手に入れよう。

この辺の地理も知つておく必要がある。

簡単な地図は持つていたし、前にも来た事があるので少しは道も分かる。

ダントンタウンの高層ビル街を田印にすれば迷つることもないだろう。

道路を一本一本確かめるようにして歩き出した。

とりあえずの目的地は日系マーケットのヤオハンだ。他にマーケットらしいところを知らなかつた。

歩いてみると、リトル東京というところは意外と狭いエリアである

ことに気がついた。

一本裏に入れば店も何もないところもあるし、ちょっと外れるとホームレスがたむろしているヤバイエリアもある。

暗かつたら気づかなかつたかもしないことにいろいろと気づいた。まつすぐ歩けばせいぜい10分くらいの距離であのつヤオハンに着くのに2時間かかった。

ヤオハンでは大した買い物をしなかつた。

目覚まし時計と、ヤカンと、食べ物を少し。あとは洗面用具だ。所持金は限られている。無駄なものを買う余裕はない。

手持ちの残りは2000ドルくらいだった。

残りは全部愛美のところに置いてきた。

これからどのくらい離れ離れて暮らすか分からないのだから、金はいくらあっても足りないだろうと思つて必要以外は全部渡したのだ。俺自身には2000ドルくらいもあれば十分だと思った。

これがなくなる前に何とかしなければホームレスだ。自分をそう追い込むことで馬鹿力が出ると思ったのだ。それに、余裕があると行動が後回し後回しになる。

自分の性格をよく知っていた。

ホテルに帰つて味気ない食事を済ませると、もう2時が近くなつていた。

昨日の店に行つてみよう。

身支度を整えてまたホテルを出た。

警備員の仕事もかなり慣れた。現場の人達とも仲良くなつた。

こう考えると、逆に現場で働く仕事でも良かったのかもしれない。最初は近くの定食屋とかに昼飯を食べに行つていたのだが、そのうち現場の人々に倣つて弁当を持つていくようになつた。仲間的な意識を持つてくれたらしく、一緒に飯を食うのが嫌じゃなかつた。

いろんな話をしながら食べた。楽しかつた。

俺のアメリカ行きの話をするとき、皆応援してくれた。

飯の時にはよく缶コーヒーを飲んだ。誰か彼かがおごってくれた。買いに行くのはほとんど俺の役目だつた。

あつという間に時は過ぎる。

いつまでも警備員をやつているわけにもいかない。アメリカ行きの準備をしなければ。

仕事は出発の一週間前で終わりにすることにした。

短い間だつたけれど楽しく働けた。ちょっと気に入つていた。
せつからく仲良くなつた人達とまた別れるのは寂しい気もしたけれど、
そうも言つていられない。

最後の日に皆で焼き鳥屋に連れて行つてくれた。

よく食べ、よく飲んだ。

とつつきづらい職人たちだけど、仲良くなつてみるとこんなにいい人達はない。

皆がそれぞれ昔持つっていた夢の話をしてくれた。

そうか、やっぱり皆夢はあつたんだ。だから、夢に挑戦する俺を応援してくれるんだ。

その日は気持ちよく酔つた。

その一方で観光ビザ申請について旅行会社の友人から朗報が入つた。

「残高証明を出して申請してもいいけど、それだと長い期間旅行することになり、却下される可能性がある。もつと簡単で、しかも断られない方法がある。」

耳寄りな情報だった。

「ビザウェーバーっていうのはさ、日本も含めてアメリカに認められた国っていう条件があるんだけど、もう一つ、認められた航空会社を使わなければならぬっていうルールがあるんだ。だから、それ以外の航空会社を使えば、観光ビザが“必要”ってことになる。」

「日本から飛んでる便で、認められてない会社ってあるのか？」

「ない。だから裏技があつたのさ。」

「ヤバイことは嫌だぞ。」

「違う違う。実はカナダ経由で入国するんだよ。カナダもビザウェーバーの対象国なんだが、実はカナダからアメリカに飛んでいる便って言つのは、実際は殆どが下請けの会社なのさ。元請は認められている会社でも、下請けの小さな会社までアメリカはいちいち審査しない。ということは、ウェーバーの対象外になり、ビザが必要となるつて言つことや。」

「なるほどな、でも俺のチケットはもつ取つたんだろう？それをカナダ経由に変えるのか？」

「ビザ申請にはチケットの現物は必要ないんだ。予約確認書だけあればいいのさ。そんなもの、いくらでも作つてやるよ。」道が開けた。

「昨日お邪魔したジョージと言います。親方にお会いできますか。」

昨日のウェイトレスが居た。

「えーと、ちょっとお待ちください。ママさん！朝言つてた人來たよー！」

出てきた人を見てちょっとだけ後悔した。

どんな人かというと、背は低いが太っている。赤いトレーナーを袖まくりして、エプロンをしている。

そこまではいいのだが、何しろ人相が悪いのだ。特に目つきがヤバかつた。

「おう、じゃあ、ちょっと座つてしまつて。」

座らずに逃げようかと思つた。

「お待たせ。で、何？働きたいんだって？」

入り口から遠い席に案内されて、逃げられなかつた。

「はい、ここで働かせてもらえないでしようか。」

「レストランで働いたことある？」

「ないですけど、どんなことでもやります。仕事も死んだ氣で覚えますから、お願ひします。」

「経験ないのか・・・。まあ、いいや。で、永住権は持つてるの？」

「持つてません。観光ビザです。」

「ビザなしか。前はどこで働いてた？」

「日本です。」

「日本つて、いつ口サンゼルスに来た？」

「昨日着いたばかりです。」

「昨日！？昨日の今日で仕事探してゐるのか！？」

それまではコルコルに座つていた親方が座りなおして身を乗り出しつてきた。

「昨日の今日じゃなくて、昨日から探しでます。腹くくつて来てる
んです。」

俺の本気が通じたのかどうか、親方はちょっとと考え込んだようだっ
た。

やがて口を開いた。

「よし、じゃあテストしてやる。明日の8時いひもつ一回来れるか
？」

「あらんです！」

どきどきしていった。何といつラッシュキー。僅か一口にして手応えが
あつた。

雇つてもいるかどうかは分からぬけど、少なくともチャンスは
もらつた。

どんなテストかは分からぬけど、ダメで元々だ。やってみるしか
ない。

調理の経験はまったくないけれど、包丁で手切るくらいは何でこと
はない。

チャンスをものに出来るかどうか。なりふりかまわず必死にしがみ
ついてやる。

その足でまたヤオハンに向かつた。

日系の本屋に行って、閉店までずっと調理の本を見た。

付け焼刃ではどうにもならないだろうが、何かせずにほいられなか
つた。

警備員の仕事も終えていよいよ渡米の準備だ。
と言つても大してやることはない。

荷物を整理してマンションを引き払う準備をするくらいだ。

俺個人のもので持つていけないものは全部捨てた。

正確には全部じゃない。写真と音源だけは箱に入れて愛美の妹の住所に送った。

電化製品は買ったばかりだったので売るのも捨てるのももったいな
いからやっぱり送った。

後は愛美的物を荷造りすれば終わりだ。

簡単な調理器具だけ残して全部片付いた。なに、食事はいざとなつ
たら外食でもいいし、弁当を買ってきてもいい。もう一週間しかな
いのだから。

ビザの取得はうまくいった。

知り合いの不動産屋に休暇証明書を作つてもらい、友人に送つても
らつた飛行機の予約確認書を持つて六本木のアメリカ大使館に行つ
た。

あまり汚い格好をしていくと怪しまれるかと思い、ダブルのスーツ
を着ていった。必要もないのに帽子をかぶり、サングラスもしてい
た。今考えるとかえって怪しい。

大使館の入り口の警備員に何故か全部英語で話された。
ビザは拍子抜けするほどあっけなく下りた。

六本木と広尾はそれほど遠くない。

警備員として行つていた現場の人達にお別れを言つておきたいと思
つた。

現場の近くまでタクシーに乗り、一番近いコンビニで降りた。

缶コーヒーを20本くらい買ってお土産にした。それが一番いいと思つた。

現場に着くと、最初は皆「誰?」といつ顔をしていたが、俺だと分かると仕事の手を休めて集まつてくれた。

「どうしたの、その格好?」

それが一番の話題だつた。

「いや、大使館でビザ取つてきたんで。」

「そうかあ。もうアメリカ人みたいだな。」

あまり面白くないギャグだが、気持ちは伝わってきた。

お土産の缶コーヒーを置いて現場を後にした。

皆、ありがとう。俺、頑張るよ。

8時に来いと言われて8時に行つても気持ちは伝わらないだらう。例え無駄でも先に行つて待つて待つて待つていた。

その日は7時半から行つて待つていた。

親方は8時を5分ほど過ぎてやつて來た。

「おう、もう來てたのか。入れ。」

とりあえず親方の後について店に入った。

「今日はまだしばらく誰も來ないからよ。その間にテストをする。さあ來た。ここが勝負だ。」

「そこの戸開けたら道具入つてるから。トイレ掃除してみる。」

「トイレ掃除って、それがテストですか？」

「そうだ。」

トイレ掃除・・・なんだ、そんなことか。

それくらいのことなら楽勝だ。そのくらい苦でもなんでもない。何しろ、「何でもやる」と言い切ったんだからな。

本当にどんなことでもするのか、汚い仕事でも嫌がらずにやるか、きちんとやるか。見るのはそんなところだらう。

どれくらい時間をかけていいのか分からないが、俺がどれだけ気合が入つているか見せてやる。

とは言つてもトイレ掃除なんでしたことがなかつた。それどころか、子供の頃から自分の部屋を片付けるのさえ嫌だつた。

どこから手をつけたものか・・・。

まあいい、とりあえず始めてみよう。

やつてみると色んなことが分かつた。

壁を洗つていたら、上からやると洗剤が流れでどこからどこまでどのくらい綺麗になつたのか分からぬ。下からやればいいんだ。

洗いやすいといふは丁寧にやりやすいが、そうでないといふは丁寧にやらないと綺麗にならない。

汚れが落ちないといふは洗剤をかけておいて、しばらく置いてからやると落ちやすい。

それにして、一覗綺麗に見えたトイレも細かく見ると結構汚れているもんだ。

裏の見えないといふや卅の風景にくつといふは一回も掃除していないじやないか。

やつて、いるうつけにかけと面倒になつた。どんどん綺麗になつて、するのが楽しかつた。

「俺、掃除のプロになれるんじやないか?」などと一人でふざけてみた。

気がつくと一時間半くらこ経つていて、全身汗まみれでぐしょぐしよになつて、いた。

ビザも取れた。準備もほぼ万端整った。後は出発を待つだけだ。出発は3日後に迫っていた。

期待半分、不安半分といったところか。だが、3日後に出発という事は、3日後からはしばらく愛美と離れになることもある。

ここしばらく渡米準備で愛美とはどこにも遊びに行つていなかつた。

今日は遊園地に行くことにした。

しばらくは一緒に遊べないからな。丸一日遊園地で過ごして、どこかでディナーを食べて帰つてこよ。

ここ何日かゆっくり起きていた俺が早起きしたので愛美は怪訝な顔をしていたが、「遊園地に行こう」の一言で急に明るい顔になり、そそくさと支度を始めた。

俺がコーヒーを飲んでいると、準備が出来てしまつたのか、子犬のようにならへで待つていた。

「分かった。すぐ支度する。」

急いでコーヒーを飲み終えた俺は軽くシャワーを浴びて支度を整えた。

今日は寒い。2人とも厚手の皮ジャンを着て出かけた。

簡単に遊園地と言つが、どこも結構遠い。

東京の中心部の道は熟知していたが郊外の道を知らないし、渋滞にはまると嫌なので電車で行くことにした。

東横線で渋谷まで出て山手線に乗り換える。新宿から京王線に乗つた。

東京の遊園地は二カ所しか知らなかつたが、愛美は一番遠い ランドには行ったことがなかつた。

新宿に行くまでは混んでいたが、朝なのでそこから郊外に向かう電車はガラガラだった。

「へへ。実はお弁当作ってきちゃった。」

東京の電車の中でお弁当・・・田舎の電車じゃないんだから。おにぎりが美味しかつた。

電車の中で昨日会いに行つた人の話をした。

「学生時代に、俺は直接教わつたことないんだけど他の科を教えていた人がいて、今東京に居るんだ。昨日その人に会つてきましたけど、口サンゼルスに行くつて言つたら大反対された。」

「普通は反対するわよね。」

「そうじゃないんだ。アメリカに行くのはいいけど、どうせ行くなら一コーエークに行けつて。ギリギリ譲つてもアトランタとかその辺に行かなきゃダメだつて。口サンゼルスとかその辺は馬鹿しかいないうから、お前も馬鹿になるぞつて言われた。」

「そうなの?」

「そうなのかも知れん。」

多分それが正しいのかもしれない。何しろ俺が口サンゼルスを選んだのは、天氣が良いという理由と、遊園地が多いからという理由なのだ。さすがにこれはその人には言えなかつた。

でも一コーエークに行くなら東京に居た方がいい。

バリバリのビジネスマンをやる気はないのだ。

俺のイメージするアメリカは、カリフォルニア、口サンゼルスだつたのだ。

「どうだ、そろそろ終わったか?」

親方が声をかけてきた。後は道具を片付ければ終わりといつもいつだつた。

「後は片付けしたら終わりです。」

「見せてみる。」

親方が入ってきた。ただでさえ悪い田つきがさらば厳しくなつている。

さあ、どうだ。やるだけのことはやつた。

親方は入り口から入つて来ず、そこに立つたまま見回している。

「おい。」

来た。こういう時によくある話だが、掃除したところを舐めると言うなら舐めてやる。いくら掃除してもトイレはトイレだ。汚いことに変わりはない。だが、舐めてもおかしくないくらい綺麗にしたし、雇つてもらつためならそれくらい出来る。死にはしないだろう。

「エプロンのあるところ教えるからこっち来い。」

肩透かしをくらつた。普通こういう時には何か一言あるんじゃないのか。

あれ?ちょっと待て。エプロンの場所を教えるということは、それを着て仕事をしろという事じゃないのか?俺、雇つてもらえるのか?

「はー!」

いつして渡米一日にして俺の仕事が決まった。

いつの間にか他の人も来ていた。

「おい、今日から入ったジョージだ。」

皆に紹介された。中には日本人じゃないのもいるようだ。

「よろしく。」

「頑張れよ。」

「Habla Español?」

待て。今何と言つた？日本人か日系人らしいが、何と言つたのか分からなかつた。

英語は結構出来るつもりでいたが、俺程度では現地では通用しないのか。

言葉が通じない理由は間もなく分かつた。

奴はメキシコ人だつたのだ。だから、スペイン語で話しかけてきたらしい。

キッチンで働いている人数の半分以上がメキシコ人だつた。
それだけではない。親方も、他の日本人もスペイン語混じりでしゃべつている。

参つたな。聞いてないぞ。何でアメリカなのに英語じやないんだ。
と言うより、何でメキシコ人がこんなに多いんだ？スペイン語を覚えないと仕事にならないぞ。

遊園地では久々に羽を伸ばした。とにかく俺はローラーコースターが好きなのだ。

愛美も俺と付き合いだした頃は苦手だったのが、今では俺以上のローラーコースターマニアになっていた。

中はそれほど混んでいなかつた。乗りたいものは全部回れた。

午後3時くらいになつてようやく一休みとなつた。

気がつくとそれまでずっと手を握つていた。

夢中で遊び、笑つて過ごした一日だつた。

やっぱり俺も張り詰めていたんだな。段々とぼぐれていいくのが自分で良かつた。

何より、愛美の楽しそうな顔を見るのが嬉しかつた。

考えてみればこの一ヶ月というもの、アメリカ行きの事ばかりで俺も愛美もあまり笑わなかつたと思う。そういう意味でもやっぱり来て良かつた。

さすがに遊び疲れて、7時頃遊園地を後にした。手をつないだままだつた。

電車の中では2人ともちょっとウトウトした。

渋谷で食事をすることにした。

こんな時間に街をブラブラするのも久しぶりだ。

相変わらず人が多い。でもこんなに人が沢山居ても、俺みたいな無茶なことをしようとしているのはこの中で俺一人だろつ。

いつも外食だとステーキやパスタなどの洋食を好む俺だが、この日はわざわざ和食屋に入った。

居酒屋ならともかく和食は高いイメージがあるが、もうすぐ美味しい和食が食べられなくなると思ってちょっと無理をした。案の定値段はちょっと高かつたが、その分美味しかった。今度こんなに美味しい和食を食べられるのはいつになるだろう。

家に帰り着くとくたくなになつていたが、不思議と田はさえていた。2人でコーヒーを飲みながらテレビを見た。今日一日で精神がリセットされて、これで戦う準備が本当に出来たと感じた。
まだ手をつないでいた。

結構広い店だった。カウンターなしのテーブル席のみで40～50席はあるだろうか。その割りにキッチンは狭い。人とすれ違うのが難しいほどのスペースしかない。

そのキッチンの端で、俺は体を折りたたむようにして皿を洗つていた。

忙しくて目が回りそうだった。

実際は俺自身は下がつてきた皿を洗つているだけで大したことはしていないのだが、どんどん皿を洗つていかないと注文に間に合わないくらいだった。

何をどうやっていいのかまったく分からぬ。回りを見ている余裕などなかつた。何がなんだか分からぬうちに時間が過ぎたらしい。ランチタイムが終わつた頃声がかかつた。

「休憩行つて来い。2時間な。メシ、何食うんだ？」

2時間も休めるのか。助かつた。メシも見える。

「ラーメン食います。作り方教えてください。」

食べ物屋ならまかないでメシが食えると思っていた。思つていた通りだ。

毎日のことだからこれは助かる。

「よし、じゃあ今作るの見てろ。麺をほぐしながら鍋に入れる。箸でばあーっと泳がせる。その間に丼にタレを入れる。このレーデルで一杯だ。時々麺の様子をこいやつて見てやる・・・もう少しだな。麺が上がるくらいになつたら丼にスープを張る。この線くらいまでだ。見てみろ、麺の上がりはこれくらい、このくらいになつたら麺を上げて・・・箸でスープと馴染ませる。後はトッピングして出来上がりだ。」

・・・簡単に言うが、どうやって麺を上げたのか全然分からなかつた。平たいザルに取つ手がついたようなので鍋をバシャバシャ

やつたかと思うとザルに麺が乗っていて、それをくるくると回した
かと思うとパシッパシッと小気味良い音で麺を湯切りした。

本当はちゃんと作ってもらつたラーメンを食いたかったが、俺はこ
れを仕事にするんだ。一日でも早く自分で作れるようになりたい。
でも、皿洗い初日の俺がラーメンを作らせてもらえるのはいつにな
るか分からぬ。でも、自分で食うものなら文句はないだろう。よ
くテレビとかでやつてるじゃないか。こつそり練習してチャンスを
待つつてやつひ。

自分で作つてラーメンを食べた。

今まで食べた中で一番まずいラーメンだつた。

メシを食つた後、休憩返上で、とカツ 口いい事を言つたが無
理だつた。とにかく休みたかつた。この後店は9時まであるんだ、
休まないと体が持たない。
時間まで裏で寝た。

いよいよ出発は明日に迫った。

今日はいろいろとやることがある。

朝一番で段ボール箱に詰めた荷物を近くのコンビニから宅急便で田舎に居る愛美の妹の家に送つた。大したものはなく、ダンボール5箱くらいだつた。他のものは既に送つてあつた。

マンションの管理人立会いの下、部屋を引き払つた。敷金は愛美宛に送つてもらうようにした。

そうなると、俺たちの持ち物は俺のバックパック一個と愛美の小さなスーツケースとハンドバッグ一個になつた。

電車で横浜に出ると、まずは荷物をロッカーに預けた。

もう俺たちに住所はない。今晚は横浜市内のホテルに泊まる予定だつた。

お茶を飲んでから、電話加入権を買い取つてくれる店に行つた。何万円かにはなつた。これで俺たちにはもう連絡先すらない。

ところが不思議なもので、もう何ヶ月も連絡を取つて居なかつた友達から昨日の夜電話が来ていた。

誰にも言わずにひつそりと姿をくらます積もりでいたのに、虫の知らせというやつだろうか。

とにかくつかまつてしまつたものは仕方がない。俺はアメリカ行きの件を話し、今晚横浜市内で会つことになつていた。

銀行に行き、口座を解約して、そのまま新しく愛美の口座を作つてすべてそこに金を移した。

20万円と、さつきの電話加入権の分を足した分だけを米ドルに両替した。これからこれが俺の全財産となる。

「もつと持つて行けばいいのに。何があるか分かんないよ。」

それは確かにその通りなんだが、どうせ最初から無茶な事をしようとしているんだ。一年か二年くらいなら働かずに暮らせる金はあつたが、遊びに行くんじゃない。

これでダメならいへりあつてもダメだよ。

ホテルにチェックインして荷物を置くと、愛美を連れて待ち合わせの場所に向かつた。

奴は先に来て待っていた。

「おう。」

「おう。」

「それ、誰よ？」

こいつとは一五歳の時からの付き合いだ。もう何ヶ月も連絡を取っていない、会うのは一年ぶりくらいだところにこの挨拶だ。

「これ、愛美。こいつ、山本。」

「はじめまして、愛美です。」

「ああ、はじめまして。」

山本のことば愛美に話してあつた。とんでもない奴だと言つひとも。

その日は居酒屋で食つて飲んだ。

ず一つとくだらない話ばかりで、アメリカのことは殆ど話に出なかつた。

奴は奴なりに氣を使つてゐる積りなのだろうか。

それにしても、最後の日にこいつと会うとはな。これも腐れ縁つてやつか。

こいつとはじんなに環境が違つても、どこに居てもこつも付き合つてきた。

こんな仲間が俺にはあと二人居る。

そいつらにもよひしきふうに言つて別れた。

最後の夜は愛美と二人きりでゆっくり過ごそうと思っていたが、こんなことになつちまつた。まあいい、まだ時間はある。その後ホテルのバーで一人で飲みなおした。

休憩が終わってキッチンに帰つてみると、ちょっと人数が減つている。皆交代で休憩に行くらしい。

店も忙しい時間は終わっていたので、俺はたまつている皿を洗いながら周りを見てみた。

なるほど、ギヨーザを巻いたり野菜を切つたりと、仕込みをしている。

隣のメキシコ人に話しかけてみた。早口でスペイン語と思われる言葉をまくし立てられた。

英語はほとんど分からいらしく。

ダメだ、こりや。やっぱり俺がスペイン語を覚えた方が早そうだ。

ディナータイムはランチとは違つて一気にお客様が来ない。その代わり、ずっと続けて客が来る。

忙しいのは忙しいし、ずっと気が抜けないのだが、ランチタイムほどではなかつた。周りを見る余裕が少しだけあつた。

見ていても何が起こつているのか全然わからないし、何をどうやつているのか皆目分からないのだが、一つだけ気づいた。こいつら皆魔法使いだ。でなきやあんな風にできるもんか。

結局何も出来ず足手まといなまま一日が終わつた。まあ初日はこんなもんだろう。明日以降もしばらくは多分同じだろうが。嬉しい誤算が一つあつた。といつのは、昼メシだけでなく晩飯も食わせてくれるのだ。

休憩している暇はないが、交代で代わる代わるメシをかき込む。

落ち着かないとか言ってられない。メシが食えるだけでラッキーだ。これなら、仕事の日は食つものには困らないじゃないか。いや、休みの日でも腹が減つたら仕事にくればいい。どうせやることなんて

ないんだから。

そう言えば、給料がいくらとか、休みがいつとか一切聞いてないな。まあいい、今日は最終面接のつもりで来たから、いきなり働くとは思つてなかつた。

その辺の話はおいおいしよう。使い物にならないうちに給料の話をするのも気まずいし。

汗と油でドロドロになつて一日が終わつた。疲れていたし、体がベタベタして気持ち悪かつたが、不思議と気分はすつきりしていた。
「お疲れさん。明日から10時半に入ればいいから。お前、どこに住んでるのよ？」

「そこのさくらホテルです。」

「そうか、じゃ、気をつけて帰れよ。」

皆エレベーターで地下の駐車場に降りていつた。

俺はタバコに火をつけて、のんびりと階段を下りていく。
わくわくしていた。仕事が決まつたと愛美に言つたら驚くだろうな。
タバコを吸い終わる頃、ホテルに着いた。

昨日はちょっと飲みすぎたかもしない。

起きたらすっかり日が高くなっていた。

今日出発なのだが、まったく実感がない。

横浜駅まで十分歩いていける、立地のよいホテルだった。その割りに値段は高くない。

と言つてももう泊まることはないだろうが。

簡単に朝食を済ませてホテルをチェックアウトした。

どうせやることもないし、早く成田に着いておくことにした。

横浜駅まで一人で歩いて行き、成田行きの切符を買つ。時間が読める分、電車が一番確実だ。

乗り込むと、バカでかいスーツケースを持つた沢山の旅行者が居た。せいぜい一週間程度の旅行であろうに、そんなに荷物があるものなのか。

俺のバックパックもでかい積もりでいたが、連中のスーツケースの方が全然大きかった。

成田に着くと、エスカレーターを乗り継いで空港へと上がって行く。ちょっと早いかもしけないが、チェックインできるだろうか。

荷物を預けてしまえば身軽になる。

先に俺のチェックインを済ませてから、国内便のチェックインカウンターに向かつた。

実は成田からは国内便も出ている。一日一本だが、俺たちの田舎行きの飛行機もあつた。

先に羽田から愛美を見送つてといつことも覚悟していたが、成田便が取れてよかつた。

愛美の方方が少し出発は早いが、出国審査などもあるし、俺の方

が先にゲートの中に入る」となるだらけ。

とりあえず成田には滅多に来る」ことがなかつたので、ぶらぶらしてみた。

お土産屋やら本屋やら結構店はあつたが、どちらも分かりづらこ空港だ。

「ちょっと待つて。」

愛美がお土産屋みたいなところに入つていく。誰に土産を貰つと書うんだ。

何軒か冷やかしながら、俺は本屋で雑誌を一冊と文庫本を二冊買つた。飛行機の中で読むつもりだったが、どうせ寝てしまつだらけ。向こうにひいて、日本語が恋しくなつたら読めばいい。

物珍しくていろいろ歩いてみたものの、すぐに飽きた。

それほど腹も空いていなかつたので、お茶しながら時間を潰すことにしてた。

しかしこの空港の店と言つのはどうに行つても何でも高い。カフュテリア風の店に入り、コーヒーとケーキを注文した。しばらくはタバコを吸いながら話をしていたが、どうにも話が弾まない。

時計ばかり何度も見てはタバコをふかす。
離れ離れになる時が刻々と近づいていた。

そのうちに俺はバッグからペンとノートを取り出して、愛美に手紙を書くことにした。

目の前に座つているけれど、口ではなかなか伝えられないこともあらし、何より手紙を残せば、愛美は何度でもそれを読む事が出来る。愛美はテーブルの下で何やらじっとやつしている。

「これ、手紙書いた。」

「あ、あたしへの手紙だつたの？何か作業してゐるのかと思つてた。
へたくそな字で書いた手紙を愛美に渡した。

「じゃ、あたしからもこれ。」

愛美は小さな箱を出してきた。

開けてみると、小さな写真立てに俺達二人の写真が入つていた。

「さつきの店で買つたんだ。これ見て頑張つて。」

写真立てごと上着の胸ポケットにしました。

よくアメリカの映画なんかで、出先に行つても家族の写真を持つて行つてベッドサイドに置いたりしているが、ああいうのを見ていたんだな。もちろん、大事に毎日見るさ。

そういうしている間に出国審査の時間が迫つていた。

お互に口に出しては言わないが、それは一人が離れ離れになる時が迫つているということだった。

一日ほど経つて、親方に呼ばれた。

「リュウさんだ。うちの会計をやつてもらつてる。」

リュウさんは所謂華僑というのだろうか。日本で生まれ育つて、もちろん日本語もペラペラだし、見た目も日本人そのものだ。そのリュウさんから説明を受けた。

「給料は月に手取りで\$1200ドル。その他にちょっとチップが入るから。休みはとりあえず週一回だな。仕事の事はヤマさんに聞いてもらつとして、チェックでいいの？」

チェックと言うのは、小切手で給料を払うという意味らしい。

「まだ銀行口座作ってないんで。今度の休みにソーシャルセキュリティ取つて口座作ってきます。」

実は俺がビザにこだわったのは、このソーシャルセキュリティナンバーのためだった。

この番号があれば銀行口座も作れるし、税金を納めることができる。税金を納めていないと、永住権を取つた時にそれまでの分を全部払えと言わた、という話を聞いたことがある。一度に払うのは苦しいが、毎月ちゃんと払つていれば、後で苦労しなくて済む。

それにしても、拍子抜けするほどまともな条件だ。
ビザなしだと、もつと安い給料でハードにこき使われるのかと思つていた。

店でメシは食えるわけだし、部屋代とタバコ代くらいしか金はかかるない。思つていたより全然楽だ。

後で聞いた話だが、実は店で働いている日本人の半分は永住権もビザも持つていなかつたらしい。

もちろん、働いているメキシコ人は皆非合法移民だ。
なるほど、俺がビザなしでもまともに扱つてくれるわけだ。

それからじばらくは、毎日同じことの繰り返しだった。

朝起きて、仕事に行って、皿を洗って、親方に怒鳴られて殴られて。メシ食つて休憩してまた皿洗つて。掃除してクタクタになって帰つて寝る。それを単調に繰り返していた。

ドラマチックなことなどそろそろあるものではない。ある意味退屈とも言える毎日だった。

ただ、毎日ものを考える暇もないほど忙しいのと、体が限界近くまで疲れていたので、退屈なことにすら気がつかなかつた。

店の人ともある程度打ち解け、仕事のペースにも慣れてきた。相変わらず皿洗いと、少しラーーメンのトッピングやオーダー通しをやらせてもらえるようになつていた。オーダーに合わせて皿や丼を出したり、ご飯を盛り付けたり、少しづついろんな事をやらせてもらえるようになつたが、全然他の人達のペースに追いつかず、怒られ続ける毎日だった。

「俺は進歩しているのか？」

と、ふと冷静になつた時に考えては自己嫌悪に陥つた。

カフェを出て、愛美と一人で出国審査に向かった。

二人とも無口だった。

出国審査をするところはちょっと広くなっているが、柵があつて、ここから先は俺しか入れない。

パスポートとボーディングパスを見せてセキュリティを通る。愛美とは5メートルも離れていないのに、随分遠くに感じる。

ここで書類を書いてから出国審査を通過のだが、この場に及んで愛美の目の前で事務的な作業をするのは何だか中途半端な感じがしてもどかしかった。

書類を書いてから、柵越しに愛美と向かい合った。

寂しそうな笑顔を見るのがちょっとつらい。

「じゃあ、先に行くから。」

先に飛行機に乗るという意味と、先にアメリカに行っている、という意味をかけていた。

「うん、元気でね。頑張つて。向こうに着いたら一回電話ちょうどいい。」

「うん、分かつた。先に行つて、必ず迎えに来るから。半年かかる一年かかるか分かんないけど、必ず迎えに来るから。」

「うん、待つてる。待つてるよ。」

その時だった。

「ひーん。」

愛美が俺にしがみついて、一瞬だけ泣いた。

今回のこと今まで一回も涙を見せたことはなかつたのに、愛美が初めて泣いた。

今までずっとガマンしていて、今もガマンしているのだろう。それが、抑えきれなくなつて溢れ出たのか。そんな愛美があらためいとおしくなつた。

人目もばからずキスをした。

出国審査は空いていて、すんなり通れた。
ここを過ぎたらもう外国になる。

係員の横を通り過ぎて、振り向いてみた。

愛美の姿が見える。まだそこに居て手を振っていた。
一瞬掛け戻りたい衝動にかられたが、軽く手を振つて先に進んだ。

そこから先は一度も振り向かなかつた。

その後一ヶ月程は何事もなく店で働いていた。そろそろ5月も終わろうかという頃、事件があった。俺がアメリカに来てから、仕事が決まったことを除けば唯一のドラマチックな事件と言つていい。

ランチタイムも終わって、皆一息ついた時だつた。突然何人もの制服を着た係官が店に入ってきた。

「移民局の者だ。しばらく誰もこの店から出ないよう！」
噂には聞いていたが、俗に言う「手入れ」だ。そうそう来るものではないと聞いていたが、まさかもうこの店に来るとは。

休憩していた何人かのメキシコ人が裏口から走つて出て行つた。
俺はキッチンに居たので出られない。

ああ、俺のアメリカの夢もここまでか。覚悟はしていたが、こんなに早いとは。「強制送還」という言葉が頭を駆け巡る。

いつの間にか表口も裏口も係官で固められている。

店の責任者として親方のヤマさんが係官と話をしているが、ヤマさんは10年以上アメリカにいるくせに英語が殆ど話せない。ウェイタレスの一人が通訳として一緒に話している。

お客も足止めされて、戸惑つている。

ヤマさんが話している間に他の係官がキッチンに入つてきてメキシコ人一人一人に順番に質問している。キッチンの入り口と店の入り口を二重に固められているので、これでは逃げ出せない。

皆カタゴトの英語とスペイン語で話しているが、ポケットから何かを出して係官に見せてている。あれは？グリーンカードか？奴ら、永住権を持っていたのか？

やがて一人だけメキシコ人が係官に両脇を固められて連れられてい

つた。奴はグリーンカードを持っていなかつたらしい。メキシコ人全部を調べ終わつて、さあ、次は俺の番だ。さあ、最後の時だ、と覚悟した。

・・・係官は俺の横を素通りしていった。

あれ？どうしたんだ？俺だけ後から調べられるのか？ドキドキした。捕まえるならさつさと捕まえてくれ。生殺しみたいなのは「ごめんだ。結局最後まで俺は調べられず、係官の責任者みたいなのが紙を一枚ヤマさんに渡して帰つて行つた。不法移民を働かせていたということで、罰金を払わなければならぬらしい。

「ヤマさん、俺、何でか知らないけど移民局に調べられなかつた。助かつたよ。」

まだドキドキしていた。

「バーカ、あいつらは日本人は捕まえないんだよ。ビザ持つてる奴とか税金払つてる奴が殆どだからな。ま、メキシコ人狩りみたいなもんだ。どうせあいつら強制送還されても明日には戻つてくるのにな。」

「でもよかつたね。グリーンカード持つてる奴ばっかりで。」

「あんなもん偽物に決まってんじゃねえか。あいつらの住んでる辺りに行けば売つてるんだよ。」

そういうもんなのか。

でも助かつた。寿命が5年くらい縮んだような気がする。ギリギリで俺の夢は先へとつながつた。

この調子なら捕まらずに行けそうな気がする。働いてる瞬間を押さえられない限り、一応観光ビザは持つてるので六ヶ月間は不法滞在にはならない。

出国審査が済んでゲート前に着いても、すぐに飛行機が飛ぶわけでもないし、搭乗 자체がなかなか始まらない。飯も食つたし、お茶も飲んだし、やることがないのでタバコばかり吸つていた。

そういうふうと思つて、免税店でタバコを1カートン買つた。何しろ安い。

さつき買った雑誌をパラパラめくついたらやつと搭乗開始になつた。

それほど乗客も沢山はないようだ。

俺の席は飛行機の後ろの方、左側の窓際だった。隣が空いていて、通路側におっさんが一人座つている。

さつきの愛美との別れでエネルギーを使い果たしたのか、感慨は特になかった。気の抜けたような状態だった。しばらくは見られないであろう日本の景色も目に入らず、ぼんやりと外を眺めていた。やがて安全のための何とかというビデオが流れ、飛行機が動き出した。日本の地に居られるのもあと僅かだ。

飛行機は滑走路に入り、一拍置いてから出力を上げる。エンジンの音が大きく響き、するすると動き始める。重力が後ろ向きにかかり、体がシートに押し付けられる。

ちょっと機首が上がったかと思うと、飛行機はふわりと飛び立つた。とつとう日本から離れたのだ。

さうばー日本！

ちょっとだけこみ上げるものがあつたが、それもすぐにおさまつた。

飛行機が水平飛行に移ると、ほどなく食事が出了。いつ食べても飛行機の食事は中途半端だと思つ。けしてまずくはないし、もちろん

うまくもない。量的に少なく見えるが、足りないわけでもない。
そのくせ力口リーだけは高い。

今回のフライトでは友人がふざけてローコレスステロール食のリクエストを入れていた。フライトアテンダントが俺の食事だけ別に運んできたのでちょっとだけ恥ずかしかった。

それほど腹は減っていなかつたが、とりあえず食べることにした。
この先食べられなくなるかも知れないから今のうちに食べておこう。

食事が終わると隣のおっさんがウイスキーを飲み始めながら話しかけてきた。

「よかつたら飲む？」

「ああ、いいです。ありがとうございます。」

「一人？俺も一人なんだよね。」

あなたと旅の道連れになる気はない。

「チケット、六万八千円だつた？」

「ああ、そうですね。」

おっさんはよほど退屈なのだろうか、いろいろと俺に話しかけてきたが、俺があまりにそつけないものだからそのうち飽きて眠ってしまった。

俺もしばらく音楽を聞きながら雑誌の続きを読んでいたが、やつぱり飽きて寝てしまった。

一人旅はつまらないと思い知った。

ヤマさんは人間的には滅茶苦茶な人だった。

昼間平気で店から居なくなるし、忙しくなければ俺一人キッチンに残して表でしゃべっているし、夜、店の金を持ったまま飲みに行つたりしていた。金が足りなければそこから払つたりした。

もうすぐ40歳になろうとしているのに結婚もせず、若い子たちを連れて遊びに行くなどしそうだった。

ただ面倒見だけはよかつた。

俺もシフトの関係で車で30分ほど離れた支店に行かされることがあつたが、その時は嫌な顔一つせずに送つてくれた。もちろん帰りも乗せてくれた。

自分が本店勤務の時でも俺を送つて、帰りの足はきつちりと他の人間に頼んでくれた。

休みの日にわざわざ呼び出されて、何事かと思つて行つてみたらメシに連れて行つてくれたこともある。

けして人間的には尊敬できる人物ではないが、何故か親しみが持てた。言うなれば子供みたいなもので、裏表がまつたくなくて、思つたままに行動するのだ。

そんなヤマさんだが、腕だけは抜群にいい。

例えばラーメンを作る時、タレを決まったレードルを入れて、スープを決まったお玉で入れる。それぞれ量が決まつているので誰が作つても同じようになってると思うが、何度も作つてもヤマさんにはかなわなかつた。同じにやつしているはずなのに、どうしてこんなに違うものかと思ったものだ。

相変わらず俺は毎日怒鳴られ殴られの毎日だが、少し仕事も覚えてきてできることも増えてきた。忙しくない時はラーメンも作らせてもらつたり、ギョーザの巻き方を教えてもらつたりしていた。

休憩時間にウエイトレスの一人と一緒に賭けを食べていた、こんな話になつた。

「ジョージさんが入ってきた時、何日くらい持つだろ? がねえって、

皆で賭けてたんだよ。」

賭けてたって・・・。

「あのいじめ方見てたら、何日も持たないだろ? ねつて皆言つてた。」

「俺はいじめられてたのか?」

気づかない俺も俺だが、そんなことをする店も店だ。

まあいいか。俺はこうして生き残つている。それに、こういう話をすると、いつとは、何とか俺も店の一員として認められたということだらう。腕はまだまだだつたが毎日仕事に来て、まぎりなりにもこなしているんだからな。そりやそうだ、ここでダメなら他はない、日本に帰らなきやならないと思って必死にしがみついてきたんだから。

そんなんある口、ヤマさんが声をかけてきた。

隣の席が空いているとはいえ、やはり飛行機の座席は窮屈だ。寝ているつもりでも体が固まつた状態で全然寝た気がしない。

それでも3～4時間は寝たのだろうか。窓から外を見てみるとつ明るかった。

飛行機の中は起き出した乗客でざわつき始めた。

とりあえずフライトアテンダントにコーヒーをもらつてタバコに火をつける。

到着まではまだ数時間あるはずだ。のんびり行こう。

隣のおっさんも昨日で懲りたのだろう、まったく話しかけてこなかつた。別に他人と話すのが嫌なわけじゃないが、そんな精神状態でもなかつたし、何より面倒くさかつた。

前のスクリーンで日本のニュースをやりだした。ヘッドフォンをつけてチャンネルを合わせる。

天気予報やら、経済ニュース、芸能ニュースなどやつているが、どれも面白くない。しばらくは俺には関係ないことばかりだし、頭が一杯なのか空っぽなのか分からぬ状態だつた。

バッグから成田で買った本を取り出して読み始めたが、田字活字を追つているだけで全然頭に入つてこない。まあいいさ、どうせこの本は何回も読み直すことになるんだ。

トイレに行つてみたら、まだ歯ブラシが残つていた。順番が違うがまあいいだろうと、とりあえず歯を磨いて顔を洗つた。ひげは伸ばしつぱなしだからそのままだ。

出てみると何人かが順番待ちをしていた。朝は皆トイレに行くものだ。皆を待たせてちょっと氣まずかつたが、少しさつぱりして席に戻つた。

ほどなく朝食が配られた。飲み物はと聞かれ、オレンジジュースとコーヒーと答える。コーヒーは後でまたお持ちしますがと言われるが、かまわざもらつた。カップに一杯や一杯では全然足りない。それにしてもアメリカのオレンジジュースはどうしてこんなに美味しいのだろう。初めてアメリカに行つたとき飛行機の中で飲んで以来、俺はオレンジジュースが大好きになつていた。

食べ終わる頃に、入国のために必要な書類が配られた。俺はビザを持つているので税関の申告書だけでいいのだが、ビザウェーバーの用紙なども手元に来た。

すぐに書き終つたが、隣のおっさんが手間取つてゐるようなので声をかけてみた。

案の定、日本語と英語の両方で書いてあるにも関わらず、書き方が分からぬらしい。

別に嫌つてはいるわけではなく話すのが面倒だつただけだし、ちょっと悪かつたかなといふ気もしていたので、罪滅ぼしのつもりで手伝つてやると、とても喜んでいた。

そこから先はそのおっさんどいつもいい話をしてもいい話をして時間を過ごした。

と、アナウンスが入る。

「当機はまもなく口サンゼルス国際空港に・・・」
やつと到着か。飛行機に乗つた時の氣負いはどこへやら、普通の旅行者のようにやれやれという気持ちになつていて。

一回大きく伸びをしてから座席を元に戻し、シートベルトをした。ちょっと早かつたが、どうせ後でやることだ。多分あと三十分くらいはあるだろうから、うとうとしたままでいよう。

飛行機が高度を下げ始める前に愛美の写真を一度見て、軽く目を閉じた。

肩の力が抜けて、いい意味で開き直つていた。

ここまで来たらもうどうしようもない。やるしか俺に道はないのだ

から。

「お前、まだあそこに住んでるのか？」

「あそこいつて、そこのがべりホテルに住んでますか？」

「お前、いつに来るか？」

「はい？」

「うち、今三人でショアして住んでんだよ。一部屋余ってるだけ
ど、お前、仕事続くみたいだしよ。」

「下宿とかそういうことですか？」

「いやいや、ショアって言つてな、皆で家賃を出し合つて住むんだ
よ。家を共同で借りてるだけだ。共同生活でも何でもないし、お互
いに干渉もしない。」

「はあ。」

「つていうか、いちいちリトル東京をお前をピックアップするの、
面倒くせえんだよ。うちからなら直接行けるだろ？」「

「家賃つてどれくらいですか？」

「350ドルでいい。電気代とかはその中から出すから。」

「350ドル・・・安いですね。でも、ちよつと考えていいですか？」

「うぬせえ。つべこべ言はずに住め。」

「ヤマさん、昨日の話なんですけど。」

「おう、いつ来る？」

「いや、それなんですが、実は俺、日本に女置いてきてて、必
ず呼ぶって約束してるんですよ。どうなるか分かんないから一緒に
は来なかつたけど。で、実際来てみたら思つてたより何とかなりそ
うなんで、金が出来たら近いうちに呼ぼうと思つてます。そし
たらアパートとか借りるつもりなんで、せっかくヤマさんのことこ
引っ越しても何ヵ月かで出ることになつたりやうと思つんですよ。」

「馬鹿、お前、すぐ呼べばいいじゃねえか。それならメインベッドルーム空けてやるからよ。一人で住め。うちは男ばかりだけど、その部屋なら風呂もトイレも別に付いてるから問題ねえだろ。」

どうしても俺を引き込みたいらしい。だが、俺にどうでも悪い話ではない。

家賃は安くなるし、部屋は今よりは広くなるだろ。正直なところ知らない他人との共同生活は面倒くさいような気もあるが、どうせ家に帰つても寝るだけだし。

「わかりました。じゃあ、ホテルの部屋代今月一杯まで払つてるので、月末近くに移ります。」

「おう、じゃあ、27日の木曜日にするか。俺と休み合わせとくからう。」

先週愛美に電話した時のことを思い出す。

田舎に帰つてしまは大人しくしていたらしが、ただ妹の家に居候というわけにもいかないので、街で皿洗いをしていくと言つていた。

あの愛美が皿洗い・・・。

そこまでは考えてなかつた。

聰明で頭が良く、人当たりもいい愛美がそこまで身を落としていたとは。

愛美曰く、どうせ長い期間じゃないからちゃんと就職してもかえつて迷惑をかけるから、だそつだ。

家賃はかかるからと、週2～3回だけ働いているらしい。

自分のことばかりで、愛美の後の生活まで考えなかつた。考えが浅かつた。

それを思つたら、また違つた苦労をかけるだろが、一田も早く呼んでやつた方がいい。

そう思つていた矢先だつた。

27日が来た。

「なんだ、お前、荷物こんだけか。」

ヤマさんが車で迎えに来てくれた。

「来た時ままですから。」

俺の荷物は来た時のバックパック一つで十分収まっていた。

ヤマさんの家はロサンゼルスのダウンタウンからフリー-ウェイで15分くらい東に行つたところにあった。意外と店やマーケットも多く、道路も広い。ちょっとした地方都市といった感じだ。

それにしてビックリしてロサンゼルスは横に横にと広がった街なんだ

るべ。

ちょっと買い物するにも、これではかなり歩かなければならぬだろう。俺も早く車を買わなければ。

構造的にはタウンハウスと言つて三軒が繋がつてゐるのだが、中に入つてみて驚いた。

リビングが滅茶苦茶広くて天井が高い。中二階のよつなところがあり、そこにキッチンとダイニングエリア、バスルームがある。階段で一階に上ると二つの部屋とバスルーム、その他に俺が住むメインベッドルームがあつた。

今まで住んでいたところが住んでいたところだけに、逆に広すぎて不安になつたくらいだ。

他の二人の住人は居なかつた。一人は会社員なのが滅多に帰つてこないし、もう一人は寿司職人で昼から夜中まで仕事、その後遊びに行つてから帰つて来て朝方寝るから、ヤマさん自身も滅多に会わないらしい。それはそれで俺にとつては気楽かもしれない。

俺の部屋もとても広かつた。端の方にヤマさんが貸してくれたベッドがあつた。スプリングはふにゃふにゃだ。クイーンサイズだが、この部屋では小さく見える。

言っていた通り部屋の中に洗面所とバスルームがあった。ウォーキングローゼットまであった。

さすがに掃除をしてあるようには見えなかつたが、それほど汚れてもない。簡単に片付けて掃除をしたらすぐ住める状態になつた。一応荷物を開いたが、タンスも何もあるわけではない。服はクローゼットにかけられるものはかけて、その他の下着などはそのまま床に並べた。ちょっと広すぎるかなと思つた。荷物がないので殺風景だ。

夕方になつてヤマさんにスーパー・マーケットに連れて行かれた。マーケットは初めてではないが、やはり大きい。見たことがないフルーツや野菜も沢山置いてある。

しかし、何より驚いたのはヤマさんの買い物の仕方だ。

大きなショッピングカートに食料品が山積みになつていく。誰がこんなに食うんだ? ヤマさんは独り者だし、大体普段は店で食べてるじゃないか。

「いいんだよ。うちにはいろんな奴が来るんだから。」

そういう理由で特に根拠もなく適当に買つているようだ。まったくヤマさんらしい。

その日の夕食はヤマさんが作ってくれた。言っていた通り何人が客も來ていたから、賑やかな夕食になつた。俺も手伝わされたが、店の物以外作ったことがない。切り物とかの準備だけで、殆どヤマさん一人で作つた。普通コツクは家では料理しないと言つが、この人は料理するのが好きらしい。

お客のお土産でケーキをもらつたので食後のデザートにした。コーヒーは俺が入れる。料理は出来なくてもコーヒーだけは日本に居る頃からずっと入れてきたからちょっと自信がある。少しは格好がつくだろう。

食事が終わってくつろぎながらじょじょに話して、お客も皆帰つていった。

洗い物や片づけを終えてリビングに戻ると、ヤマさんがおもむろに電話を持ってきた。

「おー、電話しる。」

「どこに?」

「お前の女のところに決まってんじゃねえか。」

「ああ、引っ越し話はしましたから。じゃあ、住所と電話番号だけでも教えておこうかな。」

「馬鹿、何言つてんだ。アメリカに来いつて電話するんだよ。」「ちゅつと待て。それはいくらなんでも早いんぢやないのか。」「いやでちゅつと落ち着いて、様子を見てから呼ばうと思つてるんだから。早く呼びたいのはやまやまだが、まだ何の準備もできていない。いや、ちゅつと待ては俺の方だ。」

考えてみたら、何の準備をすると言つんだ?この後何か状況が変わることか?いずれにしてもいつかここに住むなら、今と何が違うんだ?大体、日本を引き上げてアメリカに渡つて来た俺にとって、それ以上に決断が必要なことなんてあるのか?何とか仕事も見つかった、とりあえず今すぐ強制送還になりそうな気配もない、多分ヤマさんにも騙されてない。ないのは金とビザだけで、それ以外は問題ないんじゃないのか。

「向こうも呼んでくれるの待ってるんだろ?早く呼んでやれ。」

「そうか、ヤマさん、結構考えてくれたんだ。とんでもなくデタラメなオヤジだが、いいところあるじやないか。急と言えば急だけど、ヤマさんの言づ通りだ。」

「うん、そうだ、さつしよつ。愛美も喜ぶに違いない。」

嬉しさがこみ上げてきた。また愛美と暮らせる。今すぐ電話して愛美を呼ぼう。こんなに早く愛美を呼べるとは...」

俺は受話器を手に取った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3340d/>

「ジョージ。」

2010年12月1日08時44分発行